

べきであろうか。今にして思えば、あの風景こそが桃源郷なのではあるまいか。自然を無理に改変することなく、自然に負担を与えないことなく共生している。おそらく水は浅間山方面から流れてくるものを利用していただと思うし、糞尿は肥料になっていた。循環型社会、循環型文明——ほんの四、五十年前まで日本中に確かに広がっていた「森の民の文明」を、私は小諸の農家に見ていたのだと思う。自然を破壊し尽くし、物質とエネルギーも使い果たす先にえがくユートピアは、人類滅亡の図式であり、自然と共生し、永劫の再生と循環を繰り返す、ほんの少し前まで確かに実在していた農家の風景こそ桃源郷と呼ぶべきであり、地球人類を滅亡から救い出せる唯一の文明原理なのである。

かつて南アルプス・スーパー林道の建設が何本かの貴重な樹木、オオシラビソにひっかかるということで社会問題化したことがある。自然大好き人間、ナチュラリスト、

測される。そこで、その象徴ともいえる有明海をとりあげてみたい。

私は料理好きだから、テレビのニュースは、ほとんど見ないが、料理番組は事務所で録画させておくことが多い。十七、八年ほど前、NHKで有明海のタイラギ（タイラガイ）の特集があり、深夜、ひとりで楽しく拝見した。豊饒の海・有明海。潜ってタイラギを採る勇壮な漁師の姿、そしてタイラギの料理。近年になり、選挙区を福岡六区に変えた。選挙区を中心は久留米市だが、大川市方面は有明海に通じている。今度の地元は、新鮮なタイラギを大いに楽しめるだろうと心に期していた。

ところがタイラギは激減しており、しかも悲しくなるほど小形化、つまり大きく成長しないのだという。見せてもらった有明のタイラギは十数年前のテレビのシーンとは、あまりにもかけ離れた姿であった。獲り過ぎもあるかもしれぬが、大きくならないことを考えると、生息環境の悪化、何ら

環境革命家を自称する私ではあるが、スーパー林道問題には、ほとんど興味がなかった。オオシラビソを守る、守らないと騒いでいる間に、ゴルフ場、宅地造成、工業団地のため、ブルドーザーによって里山と自然草原が次々と大量に破壊されていく。失われる自然生態系の量はオオシラビソとは比較にならない巨大なものになっている。私が自然を守るとか、自然と共生しようという場合、問題にしたいのは日本列島の上に残る自然生態系の総量なのである。そこをわかっていただきたい。

今度は海の話をしよう。実は海の生態系の変化は非常にわかりにくく、数値化するのも困難である。ある先輩政治家は、「鳩山君、戦前と比べれば、日本近海のタイやヒラメの総数はわずかに十%になっているのを知っているか」といっておられた。ニシンがいなくなったたり、マイワシが獲れなくなったりしているので、日本近海における「海の生態系の悪化」は相当なものだと推

かの生態系の重大な変化を疑うのが常識というものである。豊饒の海は貧弱な生態系へ、そして死の海への道をたどっているのか。

有明海では数年前に海苔の色落ちという大騒動が勃発した。その対策会議の席で私は「これは日本の海の生態系の悪化が原因であり、有明海はその象徴だ。有明海を救えないようでは、日本周辺のすべての海が生態系の貧弱化の道をたどる。だから環境革命が必要であり、山を雑木林に戻し、海へ流れ込む水を昔のように豊富なミネラルを含んだものにしなければならぬ」と力説した。

そして本年、私は法務大臣の職にあった折、諫早湾の潮受堤防の問題に直面することとなった。

法務大臣権限法という法律があつて、国が裁判の当事者になる場合は、法務大臣が国を代表することが決まっている。たとえばC型肝炎や原爆症認定の訴訟で、国が被告となっている場合、被告・国イコール鳩



山法務大臣という形である。もちろん対処方針は厚労省が中心となるのだが、形の上で、たとえば国が控訴、上告をするとすれば、控訴権限や上告権限は私にある。

ここに諫早湾潮受堤防訴訟において佐賀地裁が判決を出した。判決は堤防の撤去や損害賠償については原告の要求をしりぞけたが、「三年以内に堤防の門をあげ、開門を五年間続けて環境調査をせよ」と命じるものだった。新聞は「国は控訴へ」「農水省は控訴の方針」と書き連ねたが、控訴するかしないかは私が決めることである。私は環境革命家、生態系中心主義者として、そこに一つの大きなチャンスを見出すことになる。

私は農水省に対して意見を述べた。要は有明海全域の生態系が重要なので、何らかの開門調査が必要であり、それを農水省が約束しない限り私は控訴しないと。

農水大臣が二度法務大臣室にみえて、徹底的に話し合い、基本的に私の考えを了解してくれた。

種多様な小動物や昆虫が生息し、秋にはキノコが採れ、春は山菜を楽しめる里山こそ、生態系の宝庫であり、永劫の再生と循環のシンボルであり、桃源郷の原点なのだ。

私は蝶愛好家であり、私の主たるフィールドである信州の里山や自然草原の激減に強い危機感を覚えていた。いくつかの種類は、すみ家を奪われ、絶滅への道をたどっている。その信州、丸子町にクヌギを中心とした雑木林がひろがっている場所を知り、二十回も三十回も足を運んだ。

そこは、まさに蝶の宝庫だった。国蝶・オオムラサキは何十と群れ飛び、軽井沢から姿を消したヒメヒカゲが、小さな茶色の翅を震わせ、クロミドリシジミ、ダイセンシジミなどのゼフィールの仲間——森の宝石といわれるゼフィール類が無数に飛翔をくり返していた。

しかし、不幸は突然にやってくる。何と工場団地に造成されてしまったのだ。しかし、今でも工場で埋まっているわけではな

① 農水大臣は開門調査をする腹を決めて、そのためのアクセスを実施する。各地の漁業者の意見をよく聞いて、開門の方法を決める。

② タイラギ、クチゾコ、ムツゴロウ、ハゼクチ、キス、メカジヤ、アゲマキなど、有明海で激減している水産資源を徹底的に調査して、その再生のために万全の措置をとる。

この二点の約束をとりつけた上で、私は福岡高裁への控訴の手続きをとったのである。

控訴するかしないかで、法務大臣が担当官庁に注文をつけた前例はないと聞いた。権限の乱用ではないかと批判も受けた。しかし、ことは未来世代に美しい国、豊かな生態系を残せるかの重大問題である以上、私は精一杯、戦うべきと考えたのである。

かつて私は文部大臣として出席した全国植樹祭の福岡県会場で「小動物の宝庫である雑木林を伐採して、針葉樹を植える植樹祭は、大きな誤りをおかしている」と批判した。スギ、ヒノキの純林は生態系を貧弱にしてしまうことを指摘したのである。多

い。おそらく、丸子町が工場を誘致して、少しでも地域の経済を活性化しようとして、無理やり、広大な自然草原と雑木林を破壊したものと思われる。

昨年も一度、むなしく、かつての蝶の宝庫に赴き、立ち尽くし、涙を流す私であった。消えた里山、消えた草原、そして消えた舞姫や森の宝石たち。それは生態系を根こそぎ破壊する愚挙である。全国的に、全世界的に経済第一主義がまかり通り、その愚挙が地球をおおうとき、自然と共生することを忘れた人類は、破滅への道をたどることになる。今回は、いくつかの具体例を示してみた。自然との共生のキーワードは、やはり生態系だと、わかっていただければ幸いである。

鳩山邦夫

1948年生まれ。東京大学法学部卒。総理大臣秘書を経て、衆議院議員。当選10回。文部大臣、労働大臣、法務大臣などを歴任。「自然との共生」をとなえ、環境革命を起こすべく活動中。自然との共生会議議長。蝶の研究、料理、菜園づくりが好きなナチュラルリスト。

